

『対話性の境界 ウーヴェ・ヨーンゾンの詩学』合評会に参加して

山口環

2023年1月20日、金先生にお声がけいただき、『対話性の境界』合評会に出席させていただきました。その数日前まで卒業論文の執筆に追われていたこともあり、本書を一字も読んだことが無い状態での参加だったのですが、金先生がなさってきたヨーンゾン研究の厚みは勿論のこと、それにコメントを寄せる他学部の生徒や院生、教授の皆さんの的確な読解と問題提起を目の当たりにして、文学研究の面白みを間接的に体験することができたとともに、当時卒論を書き上げたことによるランナーズハイを迎えていた私の心のうぬぼれた部分が、良い意味で醒めていったのを、その日の帰りに感じた冬のからっ風の冷たさとともに覚えています。当時は寝ても覚めても(卒論のテーマであったところの)ホフマンスタール『第六七二夜のメルヘン』について考えていて、見える世界が「メルヘン」一色だったのですが、むろん世の中にはホフマンスタール以外にも多くの作家、多くの作品、多くの読み方という、無数の世界が広がっており、それは私がドイツ語圏文化論教室で学んできたことでもあったのですが、今回合評会という場に参加させていただいたことで、改めてそのことに気づかされたように思います。

この度金先生に『対話性の境界』をご献本いただき、報告書という形式もご提案いただきました。合評会にて皆さんの意見を聞き、私も本書にアプローチしたいと思いましたので、報告書というよりも書評に近い形ですが、いくつか書き連ねようと思います。

『対話性の境界』を読むにあたり、まず初めに『ヤーコプについての推測』の日本語訳を入手し、第一部の終わりまで読んでみました。現時点で読了にまで至っていないのは、本書第五章の『ヤーコプについての推測』にもあるとおり、この作品が「難解」だからです。実際第一部だけでも、三周してようやく事態が呑み込めた次第で、やがてこれを読み切ろうとしてはいつまでたっても本丸にたどりつけないと判断しました。

そもそも『対話性の境界』は、そうしたヨーンゾンの「難解」さが、それを読んだことが無い人にもわかるような形で一つ一つ丁寧に解説されており、難題だった『ヤーコプについての推測』に関しても、作品の構造及びそこに発見される詩学が非常にクリアに検証されていました。本書のそのような特性ゆえに、金先生から『ヤーコプについての推測』を読むことを特段推奨されはしていなかったのですが、私はヨーンゾンに礼儀を払うような気持ちで彼の本を手に取りましたし、結果的に私が思い描いた『ヤーコプについての推測』における読み(世界観)が、本書で提示される読み(世界観)と時にぶつかり、時に重なりあうという経験をしました。この出来事は、いわばこの私と『対話性の境界』との間の対話だったかもしれません。

さて、『ヤーコプについての推測』の第一部を三周読んだと書きましたが、『対話性の境界』についても、かなり繰り返し読みました。その過程でいくつか疑問が生じたので、自ら

の意見も挟みつつ書き連ねたいと思います。

全部で三つ挙げたいと思います。第一に、“Grenze”を「境界線」と訳す箇所についてです。「第一章 詩学」は、「だが、さしあたりそれは、東西ドイツに惹かれた現実の「境界線」である。まずはそこから出発することにしよう。」¹と結ばれ、「第二章 ダイアローグ」では、東西ベルリンの国境(壁ではない)を念頭に置いたうえで、「境界線」と表記され続けます。本書の最重要キーワードと呼べる「境界」Grenzeですが、その視覚的イメージはどのようなものでしょうか。それは常に一致するものでしょうか。

たとえば、はじめ「境界線」という言葉に違和感を覚えたとき、私の中にあつた“Grenze”はグラデーションのイメージでした。東西ドイツの国境が、壁というあまりに具体的すぎるもので区切られた時に、それらが孕む問題が単純化してしまったことを思えば、壁建設以前のベルリンにあつたのは西と東の二項対立ではない、グラデーション的な(複雑な)世界だと思われたからです。また、「第四章 モダニティー 第五節 理想と憂鬱」にて、高まる波とその砕け散る様が、コレスポンダンスからアレゴリーへと移行する見立てとしてあげられています。スローモーション的に寄せては返していく波の動きもまた、様々な位相を内部に孕みながら〈最高潮〉と〈崩壊〉の一地点を通過していく、グラデーション的なものに思えます。(コレスポンダンスからアレゴリーへの移り変わりを、直接「境界」と結びつけてはいなかったかもしれません。)

一方で、「対話」は「言語ゲーム」を異にする「他者」との間に存在する、という本書の立場に立ち返ったとき、やはりそれは互いに「境界」をはっきりと持つ(あるいは、対話によって「境界」をはっきりとさせていく)個人と個人である必要があり、そうであるならば“Grenze”は曖昧さの無い「線」のイメージが適切なものかもしれないと思いました。

第二に、「対話性の破損」についてです。「第五章 『ヤーコプについての推測』」にて、「対話性の破損」箇所をあげるにあたり、ブラッハの、彼が持つ言語への懐疑に起因した「言語的な分節化の「限界」」(196)から、彼のコミュニケーション不全を見えています。言語懐疑という点で、言語を素朴に信用するロールフス(「非=世界」(205))と立場が異なるという点には同意します。

では、彼のゲジーネに対する「一目ぼれ」、すなわち恋愛は、どう解釈できるものでしょうか。言語ゲームを信じない、すなわち誰かと溶けゆく境界そのものを持たないブラッハが、ゲジーネのようなコレスポンダンス的恋愛(「無世界」(205))を持ちえないことは明らかですが、それでもブラッハはゲジーネ及びヤーコプを前にして「自分の注意力をすべて」持っていられるような思いをしたとあります(191)。この〈一目惚れ〉は一体何に起因しているものでしょうか。あるいは、ヨーンゾンの詩学に当てはめるなら、どう捉えられるべき事象でしょうか。

¹ 金志成『対話性の境界 ウーヴェ・ヨーンゾンの詩学』法政大学出版局 2020年、43頁。以下、本書から引用の際には括弧内に頁数のみを記す。

最後に、「真実探求」が持つ正義についてです。ヨンゾンが「全知の語り手」を否定し、テキストに「対話性」を織り込むことで慎重に自律した「人物」の「物語」を書いていったことは本書で解説される限りですが、一方で、「真実探求」というプログラムを据え、それを文芸に起こし、〈広く世間に発表する〉ことの主体になっているのは、あくまでヨンゾンではないでしょうか。それを出版し続けたズーアキャンプ社も同様です。虚構の中に「真実」を見つかるという、作家の道徳性に依拠した不条理な主張への解決は「第三章 パフォーマティブ 第三節 文学における「真実」」にて既になさされていますので、ここではむしろ、「第一章 詩学 第四節 〈ポスト詩学〉の状況」にて言及されているような、作家が常に内側に問い続けなければならないところの「〈書くことの根拠〉」(28)(出版することの根拠)について、すなわち「真実探求」の文学そのものの正当性について考えたいと思います。

出版に関わる部分は、作家性に属するところであって、あくまでテキストに注目して読む本書の傾向にそぐわない質問かもしれません。ですが、テキストのみで考えてみても、そこには考察を導き出す余地があるように思われます。

「第七章 『記念の日々』 第六節 『記念の日々』における対話性」において、死者と対話するゲジーネが発した「最終的な言葉」として、「知ることによって生きること」、すなわち「いかなる党派的な活動にも与せず、中立的な立場を貫くこと」(408)という立場の表明が示されました。結局、ゲジーネの言葉を受け取らない死者たちによってゲジーネは黙らされてしまうために、これは「最終的な言葉」とはなり得なかったわけですが、この(あたかも)中立的な立場が、ほかならぬヨンゾンの詩学と重なることについて、本書はその後に明確な否定を入れなかったことと思います。続くのは、死者たちによる鳴りやまない責任追及と、それらに「最終的な言葉」を奪われ続けるゲジーネです。

死者がゲジーネを責めたてるこの場面で、同時にヨンゾンの「真実探求」の精神そのものへの反省が、パフォーマティブに表現されているのではないかと考えます。ゲジーネが生きる世界にベトナム戦争が起こっているように、実際に東西の戦争が起こっている今日という日であって、「作家」の「真実探求」という「分業」は、「死者」から見れば素通りできてしまうような回答である、ということが、当該のシーンでは示唆されているように思えるのです。また『記念の日々』は、その事実を可視化している点でより高次に「真実」に近づいている作品とも言えます。

一方で、そのように考えたとき、やはりヨンゾンはゲジーネを自身のモラルの媒介物にしてしまっているということになりますし、また作者がゲジーネという「人物」の一段上の位相に立ってしまい、彼が持つ本来の詩学と矛盾してしまうようにも感じます。ヨンゾンという作家が、ゲジーネ・クレスパールら「人物」の「物語」を書き、「真実探求」のプロセスを〈世に知らしめようとした〉ことの意義は、どこにあるのでしょうか。ベトナム戦争の爆撃を頭上に感じない場所にいる、〈知識人〉の作家の、手遊び(「死者」からすれば取るに足らないもの)にすぎないということは無いはずですが。

以上が、『対話性の詩学』を読み、私が考えたことです。最後になりますが、『対話性の詩学』の中で私が最も印象に残っているのは、「第四章 モダニティー 4-3 芸術の半分」の項でした。個人的なことですが、〈永遠性〉と〈瞬間性〉をめぐるジレンマは私がここ数年日常的に考えてきたことで、物事に〈永遠〉であってほしい気持ちと〈瞬間〉であってほしい気持ちが同時に存在し、しかし結局のところそのどちらも達成されえないという落胆に何度も行きついて、その度に私の中では「世界観が閉じて」きました。今回、今まで自身の中に存在しなかった両者のジンテーゼ(「うつろいゆくものと普遍的なものは相互排他的ではない(135)」)に出会い、日常が破られたことは、まさに非日常的、すなわち対話的な体験でした。人と人の世界が交わること、知らない世界に出会うこと、すなわち「境界」を越えること、ヨーンゾンにおいてはそれが東西ベルリンという主題のもとに発現しましたが、私は日常生活の中で、特に文学研究の中でそれを発見できるように思います。また、「対話性の破損」たる、空白の部分に、文学研究の面白みの一端があるのではないかと思いました。